



ナラティヴ・セラピー さらに会話を続けよう 4

—わたしたちはどこに向かうのか
adachi-e@ris.ac.jp
安達映子

リフレクティング・プロセスとは…

- ◎『聞き手』となることによって起こる自分の『内面』との対話と、『話し手』となることによって起こる『外側』にいる他者との対話との二つに分けられ、その間の行き来を意味する (Andersen 1992 / 邦訳七八頁)
- ◎『外的会話outer talk』= 話すことと『内的会話inner talk』= 聞くことの往還にその特徴がある
- ◎リフレクティング・トークとは、『はじめの会話』、『リフレクトする会話』、そして、『リフレクトする会話への応答』の三つのパートからなるもの
- ◎その目的は…変化を呼び込み、出来事や経験を押しひろげて新しいものにしていること

△ △ △

ベイトソンの「差異を生み出す差異」

- ◎変化のためには、会話のなかに大きすぎず小さすぎもしない適度な差異が持ち込まれること、つまり「いつもと違っていても違いすぎない何かを提供すること」(Andersen, 1991/邦訳三八頁) が重要
- ◎会話と会話の行き交いに自然と訪れる「間pause」と、そこでなされた会話とその過程についての十分な「再考after thought」が適度な差異を導く源泉であり、リフレクティング・プロセスの焦点

そのちがいは…

- ◎どちらも、語る人の「中心化」を維持すること＝リフレクトする側の「脱中心化」に心をくだく / 聞くことに専念し、応えないことも含め語る人の安全性を担保する姿勢は共通だが
- ◎アンデルセン；リフレクトするものは、自分の比喩やイメージを持ち込んではいけない、自分の経験やストーリーとは距離を置くことを強調
適度な差異を導くよいリフレクトのために必要なのは、「直観」であり、「見て、聞いて、考えない」ことが大事
- ◎ホワイテ；聞き手の側に浮かんだイメージの描写や「自分史のなかのどんな経験に灯りが点され、記憶の中に蘇ったのかを語る」個人的共鳴をむしろ強調
「直観」こそを疑うべき (場の権力構造への鋭敏さ)
最後の脱構築のステップにおいて、アウトサイダー・ウィットネスの受け答えも含めて透明化し、脱中心化することが重要

PART 1

リフレクティング・プロセスとアウトサイダー・ウィットネス

- 1985 アンデルセン 「リフレクティング・チーム」の実践
- 1987 Andersen, T., The reflecting team: Dialogue and meta-dialogue in clinical work. Family Process. 26 (4) 415-428.
- 1980年代末 カール・トムがアンデルセンのリフレクティング・チームを見て興奮してホワイテのもとにやってくる →この構造を探求せよ
ホワイテ；いくつかの懸念
- 1995「定義的祝祭としてのリフレクティング・チーム」
- 1997「定義的祝祭」
- 1999「定義的祝祭としてのリフレクティング・チーム・ワーク再訪」
リフレクティング・チームの構造に刺激を受けつつ、マイヤー・ホフMyerhoffの定義的祝祭がもっとも適切な比喩 (概念) になると考え、もたらされたアウトサイダー・ウィットネス実践

それに対してアウトサイダー・ウィットネス実践は…

- ◎語られたものをより豊かに記述していくためには「人為的な」聴衆とそのための舞台が必要＝「定義的祝祭」/ 厚層記述 (Geerts)
- ◎その主眼は…**認知acknowledgment**
従属化されたストーリーの掘り起こしと復権を志向するナラティヴ・セラピー
- ◎ステップ
 - ①定義的祝祭の対象である人による、重要なライフストーリーの語り
 - ②アウトサイダー・ウィットネスとして迎えられた人々によるストーリーの語り直し
 - ③定義的祝祭の対象である人による、アウトサイダー・ウィットネスの語り直しについての語り直し
 - ④脱構築
- ◎第二段階のアウトサイダー・ウィットネスによる語り直し＝リフレクション・パートで、キーワードとなるのは「共鳴resonance」。ホワイテは上述の語り直しを構造化する質問を次のような4つのカテゴリーで明示
 - ①表現に焦点を当てること
 - ②イメージに焦点を当てること。
 - ③個人的な共鳴 (personal resonance)
 - ④忘我＝移動 (transport)



PART2

わたしはどこに向かうのか

○実践としては … 支援者支援

ナラティブ・コンサルテーション
ナラティブ・トレーニング

○研究としては … ナラティブ・セラピーの貢献

ナラティブ・セオリーにおけるナラティブ・セラピーのポジション
支援をめぐる文脈の透明化/多様性と権力勾配

キーワードは…

ナラティブの複数性
narrative multiplicity
by ベギー・ベン

散種
la dissemination
by ジャック・デリダ

わたくしのナラティブ・プラクティス

ことなる語り方の探求

そこから選択肢がふえること

△ △

その会話のパートナーとなる支援者の
＜保水力と韌性＞

それを支えるコンサルテーション/トレーニング

ナラティブ・コンサルテーションとは

○ナラティブ・アプローチの立場を前提に、＜問題の原因＞や＜事例の本質＞や＜クライアントの真意＞や＜正しい介入＞や＜あるべき支援者の姿＞を探らずに、コンサルティの実践とクライアントの利益に貢献しうるコンサルテーションの方法と実践を探求すること。

○事例や状況を一つの結論に導くことなく捉え、拡がりのなかで多様なままに保ち、そこからいかに複数の語り方を生み出せるかに専心すること。

○その中で支援者やチームの、もちろん同時にクライアントとその家族の、手にする選択肢が拡がり増えること。

参考 そもそも、ナラティブ・アプローチとは

○ナラティブ・アプローチとは、人々がナラティブ（物語story）という様式で生きていることに関心を寄せ、その視点から人々と世界を理解し、はたらきかけを試みようとする営みの総称として広く捉えることができる。

○この時最も重要になるのは、言語とは、それに先だって存在する事象や出来事、経験を写し取る手段や道具ではないし、その写し取りの行為がナラティブ（語り・語ることtelling）なのでもない ーという視点である。ナラティブとは、事象や出来事、経験といった人々の生きる世界を構成し、産み出す行為であり実践であるという、ポストモダニズムにおいて共有された言語論的転回（linguistic turn）が強く意識されている。
→社会構成主義



参考 そもそも、コンサルテーションとは

○コンサルテーションという概念を明確にしたといわれる精神科医キャプラン (Caplan, G.) は、メンタルヘルスの領域においてコンサルテーションとは、二人の専門家（その一方をコンサルタントと呼び、他方をコンサルティと呼ぶ）の間の相互作用の一つの過程であるとし、コンサルティが、自分の抱えるクライアントに関連した特定の問題を仕事上より効果的に解決できるよう、コンサルタントに援助を求める関係を指すと述べている。

(Caplan, 1970)

⇒専門家間における対等な関係における協働的プロセス

Caplan, G. (1970) The theory and practice of mental health consultation. Basic Books.

ナラティブ・コンサルテーションにおける専門性

○ナラティブな営みにおける、コンサルタントの専門性とは、他領域の専門性というよりも、ナラティブ・パースペクティブを維持しながら事例をひらくための文脈を作り、コンサルティやそこに参加する人々を多声的 (multivoiced) で多層的 (multistoried) なものに向けて案内する姿勢やスタンスを指す



ナラティブ・コンサルテーションの鍵

事例の表現/再提示 = representation

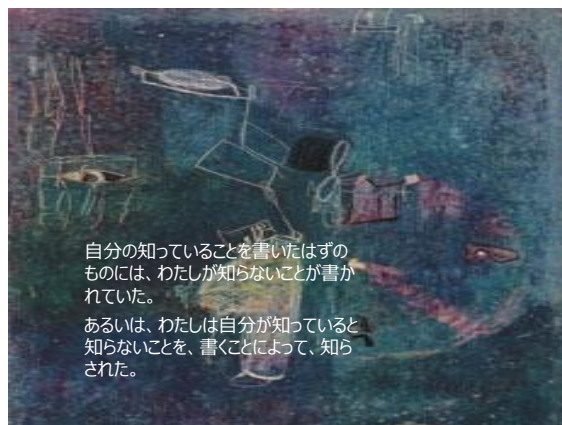
語る・書く・歌う・描く・踊る…

×

事例をひらく unpack/cultivate

リフレクティング・プロセス

○「物語としての家族」で、「外在化」とともに提示されていたのは「書くこと」だった



自分の知っていることを書いたはずのものには、わたしが知らないことが書かれていた。

あるいは、わたしは自分が知っているところから知らないことを、書くことによって、知らされた。

なぜ「書くこと」か？

○書くという行為には、形式があり構成が伴う。人称が選ばれ、時制は自由になり、比喩がイメージを増幅する。そして、ジャンルが生まれ、その文章に固有の音が響く。Sさんの時間は過去のものである。だが、その過ぎた時間を再提示しようとしたとき、物語る声は現在形を求めた。(Ricoeur, P. 217-231)

○書くことは、こうして無数のバージョン提示を可能にする。だが、繰り返すなら、それらはすべてオリジナルをもたない改訂版であり、そのバージョンごとに見える世界が変わることこそ意味がある。人や出来事、ケースと呼ばれるその状況を、重層性と開放性と非決定性のなかで受け取るために、物語的記述は要請される。

Ricoeur, P. (1985) Temps et Récit Toém III Le temps raconté. Paris. Éditions du Seuil. (久米博訳 (1990) 時間と物語Ⅲ：物語られる時間。新曜社)

「書くこと」—それはリフレクティング・プロセス

○ベンが強調するのは、「書くことのために選んだ声は、決して以前には使われなかったもの」(Penn, 2009, p. 19) であるということだ。「書くことは、私たちの認識の速度を緩め、それらを開き、そこに何かをつけ加える。それは、彼らが重ねてきた凝縮された複雑さにスペースをもたらす」(P. 25) がゆえに、語るるときとは異なる声が生まれる。

○書かれたものには、複数の声が入り交錯することにもベンは注目する。経験し記憶する者の声、それを書くための声、少なくとも二重の声がそこでは使用される。さらに、バフチン (Бахтин, 1975) に従うなら、ここにはそれを読む（はずの・かもしれない）者の声もまた必ず伴われている。

→内的会話・外的会話

Penn, P. (2009) Joined Imaginations, OH. A Taos Institute Publication.

「書くこと」×リフレクティングは最強!?

「書く」・「読む」・「読み上げる」・「聞く」・「応答する」

- 書くこと自体が含む声の複数性を自覚し、それをさらにリフレクティング・プロセスのなかに配置して拡がりを増していく実践
 - としてのナラティブ・コンサルテーション
- 書き読み上げるという過程には、自分のことばを選び、書きことばを口にし、それがまた聴き手の話しことばによって書き手に戻されるという、豊かな「間」と「再考」が偏わる。書くことは、リフレクティング・プロセスに馴染むことはもとより、それ自体をさらに厚くする作業となる。



ナラティブ・トレーニング

語りを
出来事や経験を

多声的 (*multivoiced*) で
多層的 (*multistoried*) なものとして

聴き、受け取る力

⇔ <保水力/韌性>

質問は、「受け取ること」からはじまる

いかに多重に/多様に受け取れるか =ナラティブ・コンピテンス

ベイトソン 「二重記述」→「多重記述」

ホワイト 「二重聴取」→「多重聴取」

多様なテキストにふれ、それを「読む」こと
テキストを「書く」ことで、現実の多重性と創出にふれること

ナラティブ・セラピーの貢献

ナラティブ・セラピーが<対人支援の領域> に対してできること

社会・権力・文脈

<その人の語り> が、<社会の語り> を「見知らぬもの」
として眺め返すことにまでつながること

「善きことをなす」人たちのあいだで <こそ> 起こる
暴力・虐待・ハラスメントに対してことばをもつこと

ありがとうございました

